

3

社会科の学習指導

(社会科教員調査)



1 地理的分野、歴史的分野の授業の進め方

新教育課程の全面実施となって2年目となった。各分野の履修については、第1学年・第2学年を通じて地理的分野と歴史的分野を並行して学習させることを原則としているが、実際のところ新教育課程実施にあたって各学校においてはどのように組み合わせるべきか頭を悩ませたことと思う。熟慮のうえで2012年度実施し、その成果と課題を踏まえて今年度実施したことであろう。

以上の点を踏まえて2013年度の調査結果を見ると、「1ヶ月、1単元ごとに地歴交互」に扱う割合が約7割で、2012年度とほぼ変わりはない。このことから考えられることは2点ある。1点目は2012年度実施してみて、「1ヶ月、1単元ごとに地歴交互」に扱う方法は効果的であったか、あるいは大きな問題点がなかったから継続して実施したことが考えられる。2点目は、2年間同様の方法で実施してみないと効果や問題点を明確にはかることができないという長期的な視野からの考え方である。このことから来年度の調査結果の変容を分析する必要があるだろう。

2 地理が先か、歴史が先か

地理・歴史を学期ごとに入れ替えて行う場合の地理・歴史の扱う順序についての調査結果では、学年によって傾向の違いが出ている。1年生では「地理→歴史→地理」が約66%、2年生では「歴史→地理→歴史」が約48%、「地理→歴史→歴史」が約19%となっている。このことから1年生では地理に、2年生では歴史に重きを置いていることがうかがえる。また歴史は3年生でも扱うことか

ら、3年生へのつながりも考えて2年生の後半を歴史に重きを置いている学校が多いと考えられる。

小学校6年生の最後の学習において、「我が国と経済や文化などの面でつながりの深い国の人々の生活の様子」を扱っていることから、1年生の最初に地理の「(1)世界の諸地域」を扱うことは、社会科における小中のつながりや系統性の点からも適切である。

3 社会科に関わる生徒の変容

この調査項目は「ここ数年間の生徒の変容」であることから、旧教育課程実施時と新教育課程実施になってからの比較と変容をとらえることができる。調査結果を概観すると、「以前と変わらない」の回答がほとんどの項目において半数前後で、変容が意識されていない。本来は、新教育課程実施における効果をはかりたいところであるが、まだ実施1年あまりの期間なので正確な変容をとらえることはできない。

ただ、項目において、「高まった」(+)、「低くなった」(-)の+-の数値で比較すると、4つの評価の観点「社会的事象への関心・意欲・態度」、「資料活用の技能」、「社会的事象についての知識・理解」、「主体的に学習に取り組む態度」においてプラスの方が高くなっており、プラス効果が高いとみられている。学力の水準と生徒間の学力格差について2010年度と2013年度との調査結果を比較すると、「学力の水準」の高まりを感じる教員の割合は約6ポイント高まっているとしており、「生徒間の学力格差」は横ばいという状況である。以上のことから新教育課程実施によって

わずかではあるが生徒の変容の肯定的評価が増えていることがうかがえる。今後にも期待したい。

4 社会科における言語活動

言語活動の充実、今次改訂の学習指導要領の重要な改善点であり、2012年度の調査では「ワークシートの活用」、「意見の発表」、「グループでの話し合い」などの活動が報告されている。新教育課程実施2年目となる今回の調査では、言語活動の充実について十分・不十分の両極に回答が分かれた。各調査項目の回答からは、各学校の教員が言語活動の取り組みへの不安や悩みを多く抱えていることが感じられる。取り組みが不十分と感じている教員はもちろん、言語活動の取り組みを十分にしていると感じている教員も、よりよい取り組みのために方策を求めていることがうかがえる。

言語活動の充実について、理論としては理解できているが、実際にどのような場面でどのように行うべきか、実践上での理解が不十分と考えられる。まずは実践してみることが肝心である。2012年度の調査では、「ワークシートの活用」や「意見の発表」が2回に1回以上の割合で行われている。言語活動としてのねらいや評価までを意図した活動として行われているかは定かでないが、実践してみることによって生徒の発表内容、記述内容、関心意欲から学べることは多い。また、校内研修や社会科研究会等でお互いの実践を見合い協議することで得ることも多い。実践の積み重ねが大きな財産となり、社会科における言語活動が定着されることを期待したい。

5 授業における電子機器の活用

「電子黒板」と「電子(デジタル)教科書(指導者用)」については2012年度も調査しており、「電子黒板」は20.3%→19.0%とほぼ横ばい、「電子(デジタル)教科書(指導者用)」については8.1%→13.6%と約1.5倍に増えている。「電子黒板」の活用状況は横ばいである。「電子(デジタル)教科書(指導者用)」も活用状況が増加するとともに、活用時間も2012年度より増えている。概観すると活用状況はまだまだ少ないが、教員のPC使用やネット活用は7割～8割に達しており、活用の下地はあると考えられる。若手教員の増加や教育委員会の財政措置等により今後の活用状況は増加傾向が推測される。言語活動と同様に、意図的計画的に活用し、その効果を検証することが教育活動として必要である。

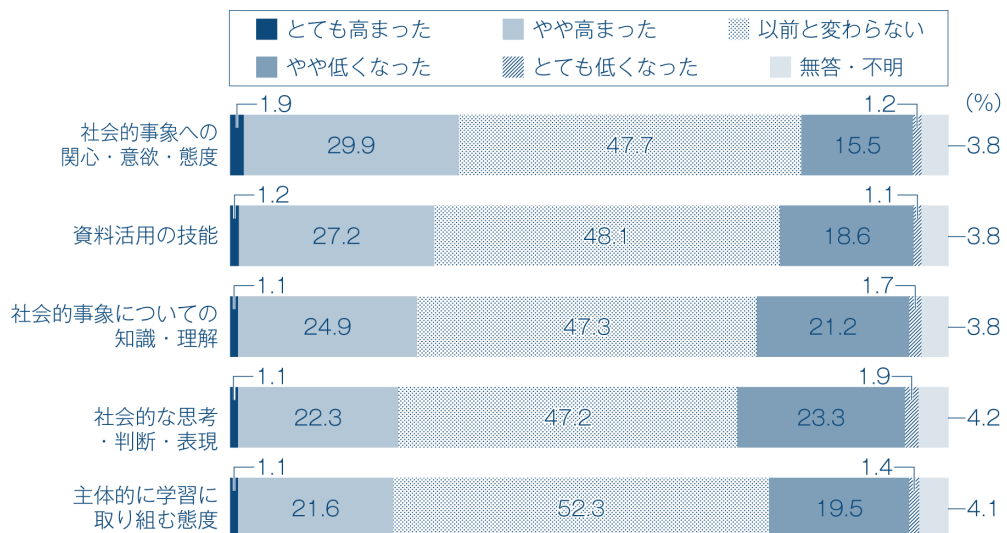
DATA① 生徒の変化

「生徒間の学力格差」を感じる割合は60.3%と依然として高い。
「学力の水準」は改善傾向に。

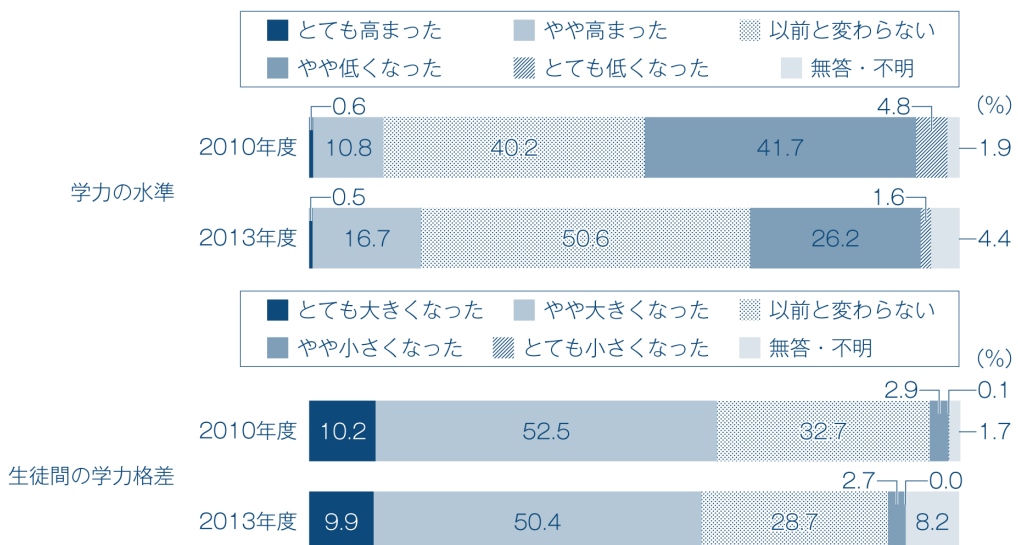
学習状況の評価の観点別に変化をたずねたところ、ここ数年の生徒の変化として「高まった」（「とても高まった」+「やや高まった」、以下同）割合の大きいものは「社会的事象への関心・意欲・態度」（31.8%）や「資料活用の技能」（28.4%）である。その他の質問項目は「低くなった」（「とても低くなった」+「やや低くなった」）とする割合と大きな差異はみられない。「学力の水準」は「高まった」と感じている教員は17.2%にとどまっているが、「低くなった」と感じる割合が2010年度46.5%→2013年度27.8%と減少している。さらに、「生徒間の学力格差」が「大きくなった」（「とても大きくなった」+「やや大きくなった」）と感じている教員は60.3%と、多くの教員が生徒間の学力の差が拡大していると感じている。

Q ここ数年で生徒はどう変わってきていると思いますか。

図3-1 生徒の変化



※「とても高まった」+「やや高まった」の合計の多い順。



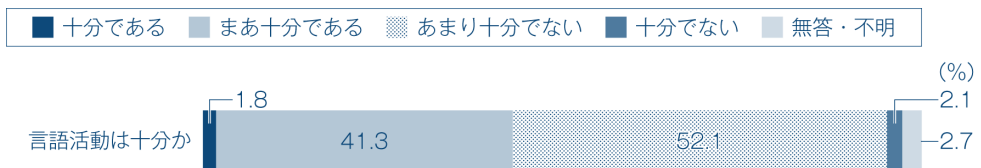
DATA② 社会科における言語活動について

半数強の教員が「十分でない」(54.2%)と感じている。課題として「具体的事例が知りたい」(85.7%)や「時間がとれない」(83.7%)などが挙げられている。

社会科における言語活動についてたずねたところ、取り組みが「十分でない」(「あまり十分でない」+「十分でない」と感じる教員は54.2%であった。また、言語活動に関する課題として感じることとして、「具体的事例が知りたい」85.7%(「とても感じる」+「まあ感じる」、以下同)や「時間がとれない」83.7%などが高くなっている。

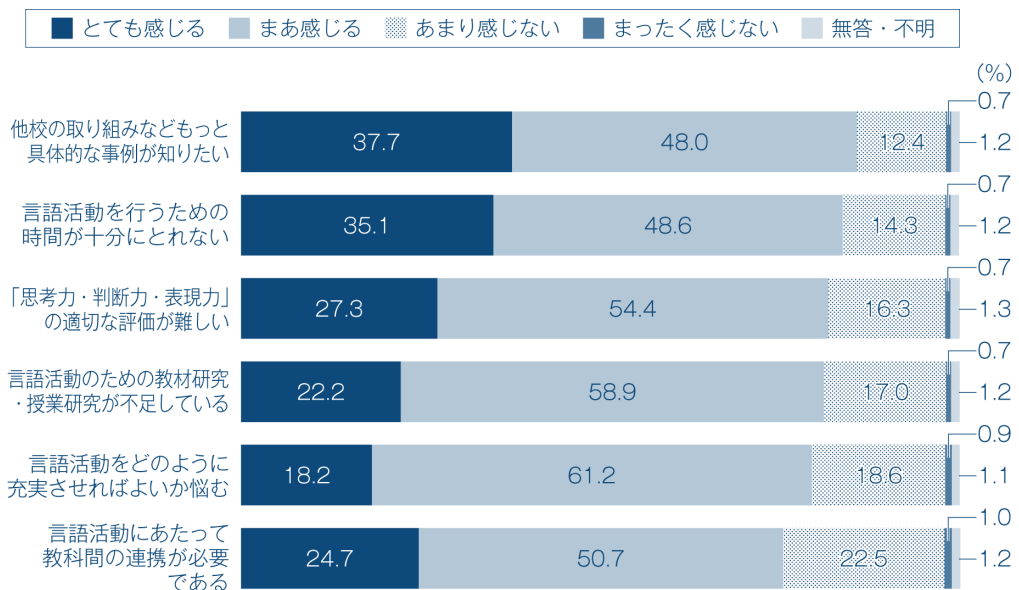
Q 社会科における言語活動の取り組みは十分だと思いますか。

図3-2 社会科における言語活動の取り組みは十分か



Q 社会科における言語活動の取り組みに関して、次のようなことを感じていますか。

図3-3 社会科における言語活動の取り組みについて



※「とても感じる」+「まあ感じる」の合計の多い順。

DATA③ 授業でのICTの活用状況

「教員がPCを使用する授業」（年1時間以上）は73.8%。「生徒がPCを使用する授業」（同）は60.2%。

社会科におけるICT活用状況について、「教員がPCを使用する授業」を実施する割合は73.8%であった。その使用時間の内訳として「16時間以上」(17.6%)、「3～5時間くらい」(19.3%)、「1～2時間くらい」(17.8%)が多く、その使用時間には差異がみられる。また、「生徒がPCを使用する授業」は60.2%で、その使用時間の内訳は「3～5時間くらい」(22.7%)と「1～2時間くらい」(23.7%)が多く、生徒がPCを使用する機会は教員ほど多くない。

Q 次のような授業を年間でどれくらい行っていますか。

図3-4 授業を行う時間数



社会科の授業での「電子黒板」の年間使用率は19.0%、「電子(デジタル)教科書(指導者用)」は13.6%。

社会科の授業でのICTの年間活用時間をたずねたところ、最も活用されているのは「電子(デジタル)教材」(29.6%)で、次いで「電子黒板」(19.0%)であった。これらの活用時間の内訳をみると、「16時間以上」使用している割合は「電子(デジタル)教材」で8.8%、「電子黒板」で6.0%であった。また、「電子黒板」の活用時間は、2012年度と2013年度とで大きな差異がみられなかった。

Q 次のツールを年間でどれくらい活用していますか。

図3-5 ツールの活用時間

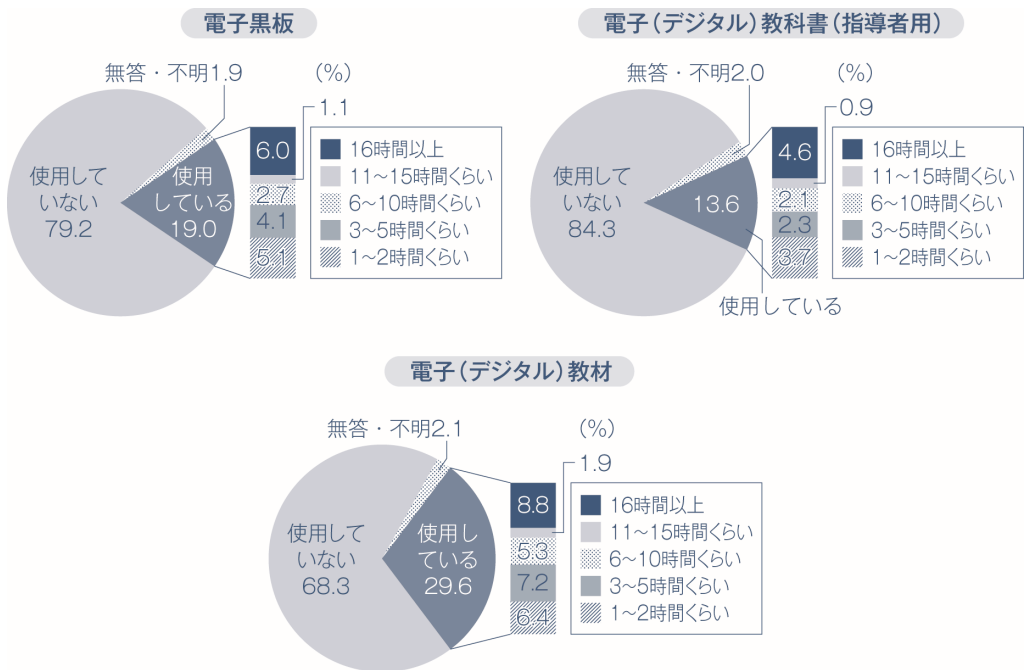
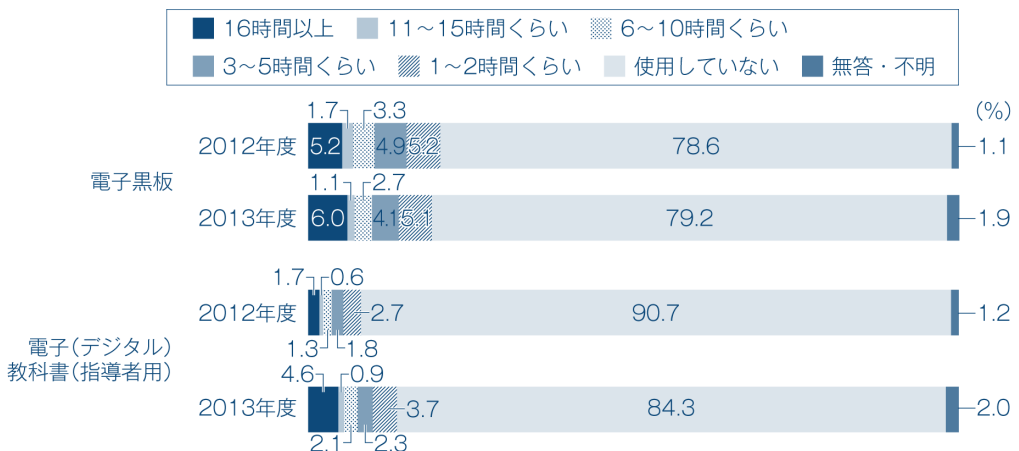


図3-6 電子黒板と電子(デジタル)教科書の活用時間(経年比較)



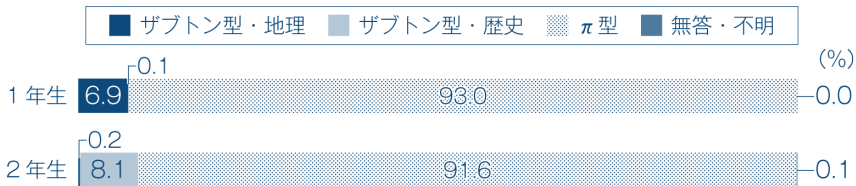
DATA④ 授業の進め方

1年生、2年生ともに π (パイ) 型が90.0%強。 π 型のなかでは、「1ヶ月や1単元の区切りごとに地理・歴史を交互に行う」のが7割弱と、最も多い。

授業の進め方については、 π 型が1年生(93.0%)、2年生(91.6%)と多数を占めている。ザブトン型は1割弱で、1年生に「地理」、2年生に「歴史」を扱うケースが多い。また、 π 型で進める場合の地理と歴史の扱い方については、「1ヶ月や1単元の区切りごとに地理・歴史を交互に行う」が1年生(69.4%)、2年生(68.6%)であった。

Q 中学1年生(中学2年生)では、どのように授業を進める予定ですか。

図3-7 授業の進め方



※「 π 型」… π の記号のように、地理と歴史を1年間のうちにともに学習すること。

「ザブトン型」…座布団を重ねるように、学年によって1年間地理または歴史のどちらか一方のみを学習すること。

Q 【「 π 型」と回答した場合のみ】地理と歴史をどのように扱いますか。

表3-1 地理と歴史の扱い方

	1年生	2年生
1週間の授業時間で地理・歴史をどちらも行う	6.3%	6.0%
1～2週間ごとに、地理・歴史を交互に行う	0.8%	0.7%
1ヶ月や1単元の区切りごとに地理・歴史を交互に行う	69.4%	68.6%
定期テストごとに、地理・歴史を入れ替えて行う	8.8%	8.9%
学期ごとに、地理・歴史を入れ替えて行う	2.6%	2.7%
1年を前後半に分けて、地理・歴史を交互に行う	12.2%	13.1%